



あ
働きに盡へる貧乏はなし
左の記号を従は修身新科書から割りと

こゝで一解を君さへる

傷くも事無人はおろかなり

人は働かざりて人生を暮しをて光見よふ

神、神のしたあ甘さとは

常働き創る人まの幸福では方り。

神の声を聞かた人よ

てけろきり味も耳にた人よ。

人生は働かざるにけり
に刻た方々こと

恥ん我もみな等にはたけりた時に

味を執る時に、しんたも取く時に、我は識るあり。

我者万々失事者なり、アメリカにあふ今更。

我等を食けりものは、作持特権かつぬり

特権かつぬり罪のつゝ方々なり。

今一更、おは言ふ。つゝ還る。

に流は労働者の所有である

罪は金持の所有である。

人、十日、人々

日、書、石、を

元三
の夜

鳴おつた。鳴おつた。

唄へる娘に

唄へる娘に。歌詞をよめ。木枯。父は甚憂す。

え。曰く。来。白く。白人の病。首をうつた。話を聞く。

友人たりは。儼す。や。か。わ。い。儼は。一。年。を。た。ま。い。た。

斗。始。に。行。み。了。春。も。来。す。

人。を。も。留。め。る。志。を。断。れ。儼。の。音。

草花。一。つ。た。い。の。意。延。に

我。は。草花。を。植。つ。や。う。と。い。ふ。方。つ。

朝。く。方。を。え。ま。う。朝。日。を。我。は。植。め。る。若。ま。な。病。を。し。め。る。

又。一。年。が。始。ま。つ。た。も。く。り。返。す。た。く。う。

我。は。心。に。も。又。一。年。の。始。ま。つ。た。

花。が。咲。め。や。う。と。い。ふ。心。に。も。又。一。斗。を。始。ま。つ。た。

我。は。草花。を。植。め。る。意。を。た。ま。い。た。

我。は。生。き。る。妻。は。あ。こ。な。く。

我。は。後。傷。を。健。康。に。お。も。は。よ。う。と。い。ふ。

我。は。泣。き。ま。す。

儼。の。音。は。こ。も。り。か。こ。も。る。

一本の木あり

あまつかとの木

木をぬき
はこ
木をぬき

花を鑑みたり
無負き鑑みたり

この木 青葉、枝 伸ひ 伸ひ

廿七を舟に、打
寄るを結はす

この木を育てる人

富みて 非徒も 身も 心も 世に 在りて 見たり

木と
我は

和は好まふ

この木
根に
この人を
ぬまう

この木、
小葉のまゝ、
枝
4葉のまゝに
付て

氣、我、心、（用）花、（を）實、（を）結、（つ）

~~六~~ ~~本~~ ~~と~~ ~~四~~ ~~世~~ ~~五~~ ~~十~~ ~~百~~ ~~千~~ ~~万~~

は、人は生かしたうゝ。世にたれど。

とすあにほあう。

五
 衣
 我
 小
 岸
 一
 実
 佳
 衣
 馬
 華
 衣
 衣

我は、小聲に「吾心、華よ、
我、心よ、吾心の華を結べ！」
おほ、吾心、華よ、と泣くのみ

あゝ
我は
心なきもの
に
なす。

五十六

とかよう

昔、私は両親に世へて自我を著たさうとした。

ある時、私は泣きかたした。何しろも、得るものなく、

山の頂へ、私は大きな草の木の下の暗い所を、静かに、

三つの頃かゝる。私は夜更けに、思ひきどほう、静かに、

私の負ふ人に、おまじの方々を、

おまじの頃

おまじ、私は、おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、

おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、

おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、

おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、

おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、

おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、

おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、

おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、

おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、

おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、

おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、

おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、

おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、

おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、おまじの頃、

靖の姓

今
私
大
子

今、
我々の
生活の
中心は
たゞ平

今
住
鄂
九
一
年

今
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

さわて事々下
いひなり生合う
はうあふをさす

和
八
三
一
二
何
也
何
也
何
也

自來水
今に何うかい。

4
 18
 何
 の
 事
 を
 お
 り
 日

此句には、転の氣が、鍵が、ある。

お芝心は打つ破り迄ある事か

新婦（左）之儀

此書は日本書に送る
 時、
 送るに
 送るに

總
 や
 大
 借
 や
 唐
 一
 九
 つ
 よ
 も

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

其仁其仁杞之膏，
華平好古也。信一

醉今夕

今旦切聲ふ左一五と
 明日夕言て授へは

人曰：吾亦一吏也。正始。

手
建

此等之書。實爲世之。其若本。所小尤。多事。之。令。

とせ

七、若く事酒は

外はあちこちにもあるが、
この山にだけある。この山に
だけある。この山にだけある。

三ノ
特
は
群
の
を
た
へ
た
分

和は時代の和と建、前世の徳語す

牛の馬にまじり

馬の力にまじり

草の味にまじり

草の味にまじり

草の味にまじり

草の味にまじり

草の味にまじり

草の味にまじり

草の味にまじり

草の味にまじり

草の味にまじり

草の味にまじり

草の味にまじり

草の味にまじり

草の味にまじり

草の味にまじり

草の味にまじり

草の味にまじり

草の味にまじり

草の味にまじり

一日の休日である

豊産に一まのへんタンの木がある

つうなにか五つしあつたつた

つうなにか五つしあつたつた

人はつうなにか五つしあつたつた

つうなにか五つしあつたつた

昨日半日一見無上のおもひ

つうなにか五つしあつたつた

つうなにか五つしあつたつた

つうなにか五つしあつたつた

つうなにか五つしあつたつた

つうなにか五つしあつたつた

つうなにか五つしあつたつた

つうなにか五つしあつたつた

つうなにか五つしあつたつた

つうなにか五つしあつたつた

つうなにか五つしあつたつた

つうなにか五つしあつたつた

つうなにか五つしあつたつた

つうなにか五つしあつたつた

つうなにか五つしあつたつた

つうなにか五つしあつたつた

つうなにか五つしあつたつた

つうなにか五つしあつたつた

蛇は長すぎる。

批評す。と言ふ人がある

とかでは足が短すぎる。

けなす。と言ふ人がある

ないうちうにうは一顧考へる。

と、言ふ人がある

墓場には墓石が変である。

おもしろい人がある

それと我々の望みである。

と言ふ人がある。

赤も青も

いふし。考へる

君の蛇もよつたう。

僕の名やうな本もよつたう。

女が淫奔であるもよつたう

人、富の前の如く推成や也位に言頂天になり

志望の定から我々中針の星男の心は降りるもよつたう

道徳のくして此等の頭髪が一列に揃へるや理はない

（口角をきく）

自身は自昇降を吟むさうだ。

一 方から花びら出た 土あがき

一 雨露やう 雨やう 光りやう

一 何にもやなくて 喰ふだけ食ひし

一 果に歸つては子を 増やす。

たか 誰をもさるゝさるゝさるゝさるゝ

かこ田

赤いトマト

曰夫の臭いをする

月謝三

曰美人学園に娘一人

月謝三

おしつに一本

月謝三

トスト一箱三十五

赤いトマト

コトヤ人の臭いをする

一斤五仙

おれこ買、やはら、トスト

おや人の鼻に

各りたいたアイス

トスト

赤いトマト

罐詰にあらた

地味スミツコ

曰夫の臭いをする

かこ田

思ふ方を討たろ

和はゆ針で又た

或る日は

祖父が奥く大八事のヤトおしをいた。

娘も平次と遊ばふおれ大八事や。平次はうたを歌いた。
田舎路の坂路に又正をあらわした。おれは二つた。
おれはをよつた。おれは二つた。

おれは三つた。おれは二つた。おれは三つた。

おれは三つた。おれは二つた。おれは三つた。

おれは三つた。おれは二つた。おれは三つた。
おれは三つた。おれは二つた。おれは三つた。

和は自由の生はは太平な力う

和は自由の生はは太平な力う

和は自由の生はは太平な力う

和は自由の生はは太平な力う

和は自由の生はは太平な力う

和は自由の生はは太平な力う

和は自由の生はは太平な力う

和は自由の生はは太平な力う

和は自由の生はは太平な力う

和は自由の生はは太平な力う

和は自由の生はは太平な力う

和は自由の生はは太平な力う

夜に晝夜に延確す
智作、うゑてかへ

३७८

三

[illegible]

早、我三十進
芝浦一之
其分(五)
五〇九一の
三二

予々共
あつたに
てんを
運本

ちたすゝにま
±^キ±^キ±^キ
この筆を

序文 別方し、
既も市人、
情を以て
之に

[illegible]

筆
 封
 印
 下
 十
 七
 九
 方
 九
 二

木乃の多分。霜よりおそろしく風うなくさめつのおりや、

我乃若木心
 新く生芽に
 照くこと
 吾乃
 時にはあ
 日のさやかと

忍
あ
あ
く
ろ
く

罪
と
汚
木
と
不
幸
が
不
幸
の
た
か
に
こ
も
て
お
や
う
に

甲にん、その事もいにて、あなたへ行く所を考へ

萬二千二百五十八

新常碩の妻やふ 君の心と 本妻一や 入いば あゝうみうんたう

水島もたふ
坂下にもなく
安こむわ
あはれ

人人之性其安く其男を身素
24. 5. 10 女を身素 言のん心くく

傷
ギ
方
ヤ
コ

傷
キ
方
ヤ
イ
コ

[illegible]

何處に心を置くか。三十七番ちやない。

中村もたきやうを
くはひおとす

いふすにちつて

[illegible]

此等の人々に傷をあたふ(と)りて言はうと云ふ。

四
一王をあらへん
べつにハもけり
（五）
は、くゝ

今更人々を
我々に与へて
我らに可なり

是に
 金々も
 七、八
 十人
 茶を
 飲む方
 所は遠く

[illegible]

Feb 14 3

気 毫

努力者よきところなりと努めざるを惜まざる

あぬが工場長に有る日

彼は副工場長に有るんだと

お前は心の窄いやつだ

お前が持てる十番燈を誰かにも持たせろ

お前の田は世の中お前が誰よりも可なり

お前は人間の善性を論じろ

お前は人間の善性を論じろ

お前は人間の善性を論じろ

お前は人間の善性を論じろ

お前は人間の善性を論じろ

お前は人間の善性を論じろ

お前は人間の善性を論じろ

お前は人間の善性を論じろ

スクリット仲たて

葉葉。その葉

葉

スクリット仲たて葉葉

その葉

室のすぢに挿し眺め

事もあつ あもあつ

三男の書さ心

スクリット仲たて葉葉の香葉(煙を)

心にし入る三男のうきまに

胸を撫で

ス三七 五三〇

鳥は鳥を呼ぶ
我が心は我が心に響く

衆の日はさくこぼる

我は衆の心を感ず

衆の心は我に響く

衆の心を感ず

お大さ

お大さ

衆の心を感ず

お大さは何ぞ

衆の日

衆の心を感ず

衆の心を感ず

衆の心を感ず

衆の心を感ず

47

15/11/44

十
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

1. 生命の

花
一
其
乃
心

其は其にカスルと云ふ
生介入ある。

世は世にたふ
 傷く世に傷は
 傷の生を失つゝ
 世は世にたふ
 傷く世に傷は
 傷の生を失つゝ

表 軍の^い本^の金^の一^のす^のめ^の曲^のや^のた^の。
と^のう^のた^の。

今のうち

葦花のうた

生命とは、つら白にたつてゐる。

老人になつて

所子にた³₂て³₂た³₂

林考に事あるを
サレの事とす。

1 2 3 2 2 1

草花に
かゝる
こと
た

1
2
3
2

一
三
一
又
一
二
た
ろ
ろ
た
ろ

一
三
二
十
二

田に死に別れたに
たの、お前、い人たにたのしく別れたに
ても、お前は田のたのしく別れたに
矢う、お前は田のたのしく別れたに
田に死に別れたに

23. 10. 22

雨絲心曳

雨が降る

十一、二

無心にならんあか心は霞の雨あらしを散く

雨が降る

降りほく

舞踊の雨が我が心に降る

ふんわりと

心の雨はあか心は霞の雨あらしを散く

無心にならんあか心は霞の雨あらしを散く

心の雨はあか心は霞の雨あらしを散く

雨はあか心は霞の雨あらしを散く

たこやうた

雨あらしを散く

雨あらしを散く

雨あらしを散く

雨あらしを散く

雨あらしを散く

雨あらしを散く

雨あらしを散く

雨あらしを散く

雨あらしを散く

雨あらしを散く

雨あらしを散く

心七

あゝ女の 新語

傷けい、傷けい。なほ正々だと謎が分かった。

靴下が破れ、襦袢が破れ、腰布を買ひ金のかつ生活をして出恥一つとは思はれり。

明日の電燈代を共面し、から代を過剰して三才の娘の病室に醫者を迎へてこの世を閉めるとなされなく思ふ。

私は毎日く仕事仕事をはげめて、更に氣、得ぬ生活を。いしやうを。

私は取寄を倉庫に合せて何をか何を知りぬ。

星々の秋空に仰ぐ私の若春は私は知れぬ。

佐治の庭木の裡で夜更の霜柱に似てゐる。

お心の大地に我々の大陽が照らす光は、車知な生活。まゝの

春聲の聲は。

人々平和な生活。

私の昨日、私の明日は、私の明日。

9
7
5

あ
新
井
田
一
郎

附

肩を引合ふ来はもの文なう

たまたま

二
十
四
五
六
七
八
九
十

言つて變ぢたのには。

葉は
 カニ
 カニと
 腹
 リ
 空く
 牽
 むの
 大
 口
 に

Handwritten notes or signatures.

たのた

いづれに
いふ

4

2-7d

[illegible]

何
乙
子
不
地
好
尤
之
新
15
月
十

お利は
12
い
1
軍の元

木下なる子。

